

2026.05.17.

「わたしは在る」

旧約 出エジプト記3章14～15節

新約 ヨハネによる福音書8章48～59節

1. はじめに

共々にヨハネによる福音書を読み進めていきますが、イエス様と人々との会話において「何を言っているのか、良く分からない」あるいは「会話になっていない。話が通じていない。」そういう思える箇所にも何度も出会います。今朝与えられている御言葉も、そのような箇所の一つです。そのような箇所を読むときに大切なことは、イエス様の前提とイエス様と議論している人達との前提が違うということに気がつくことです。その違いは単純に言いますと、イエス様は見えない世界のことを語っているのに対して、イエス様と議論している人達はこの見える世界のこと、この世界で当たり前とされていることを前提に語っている。イエス様はご自身が神様の御許から来られた神の御子で在り、ただ信仰によって人々を救い、永遠の命を与える者として来られた方として語っているのに対して、ユダヤ人達は自分達が神の民であり、律法を守り、正しい者であり、救われるのが当然と考えている。この両者が話すわけですから、話がかみ合わないわけです。私共は当然、イエス様のお語りになることを本当のことだと受け取り、信じます。しかし、ユダヤ人達の言っていることも分からないわけではありません。どちらかと言えば、ユダヤ人の言っていることの方がこの世の常識で話していますので分かりやすいほどです。それは、イエス様を神の御子、救い主として受け入れないのであれば、このユダヤ人達と同じようにイエス様を受け止めてしまうことになるということです。私共がイエス様がお語りなりことが本当のことだと受け止めるのは、イエス様を神の御子と信じ、この方によって救われ、この方を愛しているからです。言葉とはそういうものです。その言葉をお話している人が誰であるかということが、とても重要です。同じ言葉であっても、信じるに値しない人の言葉ならば、私共はその人が言うことを信用しないでしょう。ユダヤ人達がイエス様の言葉を本当のこととして受け入れなかったのは、イエス様を信じていないし、イエス様を愛していないからでした。愛と信頼がなければ、言葉は相手の心に届かないというのは本当のことでしょう。

そして、イエス様と議論が交わされているところを読むときにもう一つ大切なことがあります。それは、確かにイエス様は実際に自分の目の前にいる人達に対して語ったのですが、その言葉は実は聖書を読む私共に向けて告げられている言葉だということです。イエス様は、御自身が誰であるかということ、その言葉をもって、あるいはその御業によって私共に示しておられます。私共はそのイエス様の伝えようとしていることを聞き取らなければなりません。それが「聖書を読む」ということです。

2. ユダヤ人達とイエス様の論争① 前回まで (アブラハムの子、神の子、悪魔の子)

さて、今朝与えられております御言葉は、8章31節においてイエス様がダヤ人達に「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。8:32 あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」と告げられたことから始まりました。このイエス様の言葉に対してユダヤ人達は、「自分たちはアブラハムの子孫であって、奴隷になったことはない。だから、真理はあなたをたちを自由にすると言われても、既に自由なのだから必要ない。何を言っているのですか。」そう応対しました。彼らは「自由」ということを、社会的な自由、奴隷ではない状態としか理解できませんでした。しかし、イエス様が告げられた「自由」とは、自らの罪や欲からの自由であり、神様に従う自由ということでした。そしてイエス様は、「あなたたちがアブラハムの子孫だというのは、血統・血筋の話であって、本当のアブラハムの子ではない。本当のアブラハムの子、アブラハムの子孫ならば、私の言っていることが分かるはずだ。」と答えられました。アブラハムというのは、ユダヤ人にとって神の民がここから始まった大切な自分たちの父祖であり、アブラハムの子孫であるというのが自分たちユダヤ人の誇りでしたから、このイエス様の言葉を聞き捨てにすることは出来ませんでした。ユダヤ人達は、更に「自分たちは神の子だ」と告げます。それに対してイエス様は、「あなたたちはアブラハムの子でもないし、まして神の子でもないし、悪魔の子だ」と告げます。イエス様は、自分の罪を知らず、認めず、神様の御前に悔い改めることを知らない者は、神様から遠い者だ、アブラハムの子でも、神の子でもない。それどころが、そのような者こそ「悪魔の子」と言うべきものだと言ったわけです。神様の御前にひれ伏すことが出来ないのは悪魔だということです。誤解がないように言っておかなければなりません、イエス様は「悪魔の子」と言っても、その人を絶対救われない人として見捨てたわけでも、切り捨てたわけでもありません。何故なら、イエス様はその「悪魔の子」のような者たちのために十字架にお架かりになられたからです。そしてイエス様は、「あなたたちが神様の子だと言うのなら、どうして神様の御許から来た私の言葉を受け入れず、私を愛さず、私を罪ある者のように扱うのか。」と告げます。イエス様は神様によって遣わされ、全ての罪人を救うために来られました。これが神様の御心であり、真理だからです。自分を神様の御前に正しい者とするなどということは、真理からほど遠いことであり、イエス様を遣わされた神様の御心を真っ向から否定するものだ。それがイエス様がお告げになったことでした。

3. ユダヤ人達との論争② 悪霊に取り憑かれているのは誰か? : 栄光は誰に

その議論の続きが、今朝与えられている御言葉です。イエス様に「悪魔の子」とまで言われて、ユダヤ人達も黙っているわけにはいきません。彼らはイエス様に対して「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれていると、我々が言うのも当然ではないか」(8:48)と告げます。サマリア人というのは、元々イスラエル12部族に属する者たちでした。イエス様の時代より900年ほど前に北の10部族は北イスラエル王国を建て、ユダ族とベニヤミン族が南ユダ王国を建てました。この時の南ユダ王国の民がイエス様の時代のユダヤ人です。一方、サマリア人というのは元々は北の10部族だ

ったのですが、アッシリアに滅ぼされて以降、変わって行ってしまいました。ユダヤ人達から見れば、神の民のくせに神様の律法を守らず神様から離れて行ってしまったとんでもない裏切り者ということになります。ユダヤ人達はサマリア人達を異邦人に対するよりももっと激しく蔑視していました。ユダヤ人達はサマリア人達の土地を通ることもしませんでしたし、口をきくこともしない。そんなことをすれば汚れてしまうと考えていたからです。ユダヤ人達はイエス様をそのようなサマリア人だ、つまり神様から遠く離れ、神様の御心も知らず、救われることのない者だ。そして「悪霊に取り憑かれている」と告げたわけです。イエス様から「悪魔の子」とまで言われたのですから、ユダヤ人達がイエス様に対してこのように言うのも分からないではありません。売り言葉に買い言葉の様相を呈してきました。

しかし、イエス様は当然、これに反論されます。「わたしは悪霊に取りつかれてはいない。わたしは父を重んじているのに、あなたたちはわたしを重んじない。 8:50 わたしは、自分の栄光は求めている。わたしの栄光を求め、裁きをなさる方が、ほかにおられる。」(8:49.50) イエス様はただ言い返しているわけではありません。「悪霊に取り憑かれていない」ということは、どういうことかをはっきり告げます。私は父なる神様を重んじている。だから自分の栄光を求めない。これが悪霊に取り憑かれていない者の証拠だということです。逆に言えば、悪霊に取り憑かれている者は、自分の栄光を求める者だということになります。これは、良く心に留めておかなければなりません。イエス様は「自分の栄光を求めない道」を示してくださいました。これが私共の歩むべき道です。この世は、皆、自分の栄光を求めます。自分の富、自分の地位、自分の評判を求め、自分は中々の者だと思いたいわけです。そのような思いが少しも無い人はいないでしょう。しかし、それが人生の目的になってしまえば、それは本末転倒です。神様が私共に与えてくださった命とは、そのようことを目的とするものではありません。そうイエス様は教えてくださったわけです。では、私共は何を求めのでしょうか？それが「神様の栄光」です。私共の教会の伝統において標語のように受け告げられてきた言葉は「ただ神にのみ栄光あれ」です。神様の栄光が現れる、神様の御名が誉め讃えられる、神様の御心になる。それが一番だ。私共自身が大神した者だと言われることなど、どうでも良いこと、つまらないことです。イエス様はユダヤ人達に「あなたたちは人々から立派な人だと言いたい、自分は大神した者だと思いたい」そういうことを求めているのではないか。それが神様を重んじている者のあり方ですか、と告げられたわけです。

4. ただ神に栄光あれ

私は 20 歳で洗礼を受けましたが、18 歳まで教会にも行ったことがありませんでした。そして、今思えば「自分の栄光を求める」という以外の生き方があることを全く知りませんでした。私は結構真面目な青年でした。真面目に勉強し、良い成績を取って、良い学校に入って、良い会社に入って、というようなことを漠然と考えていた中高生でした。しかし、イエス様に出会って、そんなことのために私は神様にこの命をいただいたのではないと知りました。でも、その時にこの世において良きものを手に入れたいという思いをきれいさっぱり断念できたわけではありません。そして、

自分は何をしていけば良いのか、その時はまだ分かりませんでした。ただ、神様に喜ばれる人生を歩みたいとは思いました。結局、27歳で会社を辞めて神学校に行ったわけですが、「ただ神にのみ栄光あれ」ということが、私にとって具体的にどのようなことになるのか、それが腑に落ちるまでには時間がかかりました。それほどまでに「自分の栄光を求める」ということが当然のこととなっており、私の中で力をもっていたということなのでしょう。「ただ神にのみ栄光あれ」ということが一人一人にとって具体的にどういうことになるのか、それは一概には言えません。神様が色んな出会いを与えてくださり、一人一人に道を開いてくださってお示しくださることでしょう。私共はその神様からの促しを受けて、感謝と信頼をもってその一步を踏み出していくことです。

5. ユダヤ人達との論争③ 預言者やアブラハムより偉大なのか？：永遠の命は誰に

イエス様は続けて「はっきり言うておく。わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」(51節)と告げられました。イエス様が与えてくださる救いの核心である「永遠の命」がここで告げられます。しかし、これもまたユダヤ人達には通じませんでした。ユダヤ人達はこう反論します。「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今はっきりした。アブラハムは死んだし、預言者たちも死んだ。ところが、あなたは、『わたしの言葉を守るなら、その人は決して死を味わうことがない』と言う。8:53 わたしたちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死んだではないか。預言者たちも死んだ。いったい、あなたは自分を何者だと思っているのか。」(8:52-53)なるほど、とても分かりやすい反論です。アブラハムも旧約の預言者達も、皆死んだではないか。それなのに「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」とはどういうことか。死なない人なんているのか？あなたはアブラハムよりも旧約の預言者達よりも偉いのか？偉そうにするのもいい加減にしろ。自分を何様だと思っている。そうユダヤ人達は言ったわけです。

ユダヤ人達は「その人は決して死ぬことがない。」というイエス様の言葉を、文字通り死ぬことのない肉体の命としか受け取ることが出来ませんでした。しかし、イエス様が告げられたことはそんなことではありませんでした。イエス様だって十字架にお架かりになって死ぬわけです。しかし、イエス様は三日目に復活されて永遠の命というものを私共に証しされました。私共もやがて時が来れば、この地上での命は終わります。例外はありません。しかし、私共の命はそこで終わるわけではありません。イエス様が復活されたように、私共はイエス様が再び来られるときに復活します。その時、私共の救いは完成します。この復活の命というものは、キリスト教信仰において最も信じることが難しいことかもしれません。イエス様の弟子たちだって、復活されたイエス様に会うまで信じる事が出来なかったほどです。しかし、ここに私共の決して失われることのない希望があります。この希望は、肉体の死によっても潰されることのない希望です。これを私は「強靱な希望」と呼んでいます。これほど強靱な希望はありません。

6. ユダヤ人達との論争④ アブラハムを見たのか？：

「わたしたちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。」(8:53)とユダヤ人達に言われて、

イエス様は「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」(8:56)と答えられました。アブラハムは神様がご自分に約束してくれた、全ての者が神様の祝福を受ける日を待ち望み、楽しみにしていたに違いありません。そして、その為にイエス様は天の父なる神様の御許から来られたわけです。イエス様は天の神様の御許においてアブラハムと会ったことを告げているわけですが、ユダヤ人はそんなことは分かりませんし、そんなことを認めるはずもありません。それで、ユダヤ人達は当然「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」(8:57)と告げました。アブラハムというのはイエス様の時代より千数百年前の人ですから、ユダヤ人が言うことも分かります。彼らはこの地上における歴史しか知りませんし、その歴史の中においてある期間だけ生きる人間の命しか知りません。しかし、イエス様は永遠から永遠に生きておられる父なる神様の御子であり、イエス様もまた父なる神様の御許において永遠に父なる神様と共におられた方です。ですから、イエス様にしてみればアブラハムは遠い遠い昔の人なんかではないわけです。しかし、ユダヤ人達にはそんなことは分かりません。そして、イエス様はここで更にはっきりと、御自身が神であることを宣言されました。それが 58 節でイエス様が告げられた「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」と告げられた言葉でした。

7. 「わたしは在る」：神の御子としての宣言

ここでイエス様が語られた『わたしはある』という言葉は二重カギ括弧が付いています。これは、ここを翻訳した人がこのイエス様の言葉は旧約からの引用である、イエス様は旧約からの引用としてこの言葉を語られたと理解したということです。それは旧約のどこの言葉かと言いますと、先ほどお読みしました出エジプト記 3 章 1 4 節の言葉「神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」において、神様が御自身のことを「わたしはある」という者だと告げられた、その神様の言葉をイエス様はここで引用されたということです。この出エジプト記の 3 章というのは、イスラエルの民をエジプトの奴隷の状態から救い出すためにモーセが神様に召し出された場面です。この時、モーセはすぐに「ハイ、分かりました」とは言いませんでした。色々理由を付けては、この神様からの召命を断ろうとします。その時モーセは神様に「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」(出エジプト記 3:13)と告げます。それに対して神様がご自分の名を「わたしはある。わたしはあるという者だ」とお告げになったわけです。これは神様の自己紹介の言葉、神様がモーセに告げたご自分の名前と考えても良いでしょう。つまり、このイエス様の「アブラハムが生まれる前から『わたしは在る』」という答えは、「わたしはアブラハムが生まれる前からずっと生きている神である」「わたしは神だ」と宣言されたということです。

私共はそう言われてもピンとこないかもしれませんが、ユダヤ人達はイエス様のこの言葉を

聞いてピンとききました。そして、「何というとんでもないことを言うのか、こんなことは決して赦されない、神様に対しての不敬だ、侮辱だ、とても生かしておくわけにはいかない」そう思ったわけです。ですから、59 節において「ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。」のです。これはユダヤ人達がイエス様と口げんかをして、ついに頭にきたので石を投げつけようとしたということではありません。そうではなくて、彼らはイエス様を「神様を愚弄する者」、「神様を侮辱する者」と認定し、石打の刑によって死刑にしようとしたということです。それは律法にその様に記されているからです。（レビ記 24:14-16「 24:14 冒瀆した男を宿営の外に連れ出し、冒瀆の言葉を聞いた者全員が手を男の頭に置いてから、共同体全体が彼を石で打ち殺す。 24:15 あなたはイスラエルの人々に告げなさい。神を冒瀆する者はだれでも、その罪を負う。 24:16 主の御名を呪う者は死刑に処せられる。共同体全体が彼を石で打ち殺す。」）

しかし、神様の時はまだ来ていませんでした。イエス様が死ぬのは、全ての人の罪を贖う犠牲、生け贄として十字架において捧げられるためでした。その時はまだ来ていなかった。ですから、ユダヤ人達がイエス様を石打の刑で殺そうとしても、こり時そうすることは出来ませんでした。

8. まことの神にしてまことの人 神様の見えない姿と見える姿

ユダヤ人達はイエス様に「あなたは自分を何者だと思っているのか。」（53 節）と言いましたが、イエス様の答えは最初からはっきりしていました。それは「わたしは父なる神様の御許から遣わされた神の御子であり、神であり、永遠に生きる者である」ということです。イエス様はこのことを様々な言い回しでお語りになりました。天地を造られた神様は、誰にも見えません。見た者もおりません。しかし、その見えない神様が御子イエス・キリストに見える姿でお遣わしになりました。私共はこのイエス様を「わが主、わが神」、「まことの神にしてまことの人」と信じ、この方を崇め、拝み、賛美しています。この方によって一切の罪を赦され、救っていただいたからです。イエス様は愛の人で、奇跡を行える、少し他の人より偉い人というわけではではありません。「まことの神にしてまことの人」です。私共は主の日の礼拝の度に、この方が私共のために十字架にお架かりくださったこと、三日目に復活されたことを思い起こし、この方の救いに与り、永遠の命・復活の命を与えられていることを心から感謝するわけです。そこに命があるからです。ありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝御言葉をもって、イエス様が「まことの神でありまことの人」であることを教えてくださいました。私共は目に見えることしか知ることの出来ない者でしたけれど、聖霊なる神様が私共に働いてくださって、天地を造られた神様が私共を愛し、御子を与えてくださり、目に見えない永遠の命を与えてくださったことを知らされました。まことにありがとうございます。私共が父・子・聖霊なる神様を誉め讃えつつ、新しい一週も歩いていくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン